

ICT活用事例

【Part1】医療法人優心会 ハートクリニック

院長インタビュー



Q1 クリニックの規模や人員、診療体制や対応可能な症状などについて教えてください

ハートクリニックは地域のかかりつけ医療機関として、疾病予防から外来診療、在宅診療、入院医療、人生の最終段階における意思決定支援、緩和ケア、看取りまでをシームレスに行っています。通院困難な方については訪問診療にも対応しており、ガン末期等から難病まで様々な専門職との協働で、最期まで自宅や入居施設で診療を続けることが出来ます。

対応している患者さんの病気は様々で、一番多いのは認知症の方。その他、脳疾患・腎不全・慢性心疾患からガン末期の患者さんなどが在宅医療を受けています。最近は小児の移行期の患者さんも多くなっており、通院困難な190名を超える在宅患者さんの対応をしています。



開院当初は紹介で訪問診療を行うことが多かったですが、外来患者さんの高齢化で通院困難な方が増え、外来から訪問診療に切り替える患者さんが増えています。

当院では訪問診療の患者さんは勿論、外来のかかりつけの患者さんについても電話対応などで24時間、365日対応しています。

Q2 クリニック内での情報共有について教えてください

院内での情報共有方法は3つ。

1つ目は毎朝のカンファレンス。少し離れた所にある高齢者施設と通所介護事業所を除き、クリニックの全部署、訪問看護、居宅介護支援、訪問リハビリは毎朝カンファレンスで患者さんの状態を情報共有しています。全員参加が難しい場合は患者さんに関係する人だけ参加してもらっています。

2つ目はICT連携ツールによる情報共有。

3つ目は院内のみ使用できるグループウェアによるスケジュール管理等です。

Q3 クリニック以外の関係者との連携について教えてください

I C T連携ツールで情報共有しているのは、他の事業所も含めたケアマネジャー、10ヶ所ほどの訪問看護、病院からの派遣も含めた訪問リハビリ、デイサービス、デイケア、ショートステイ、ヘルパーステーションなどの事業所。併せて患者家族とも情報共有しています。患者家族が入ることには賛否両論あるとは思いますが、患者家族が気になることを主治医に聞くことができ、医師も毎日の確認の中で回答できます。また、そのやり取りを、訪問看護やケアマネジャーなど他事業所が見ることができるのも意味があることだと思っています。

Q4 I C T連携ツールをどのように活用されていますか？

まずは、患者及び家族にI C T連携ツールの利用について、メリットや個人情報の取り扱いについて説明を行い、家族の同意が得られたら、担当職員がツール上で情報共有できるように設定を行った上で、対象の患者さんに関わる多職種の専門職を招待します。

活用内容は、日頃の全身状態やバイタルサインのチェック、傷や褥瘡などの写真の確認。また、主治医への質問などに対してコメントもでき、その情報を誰が見ているのかをチェックすることも可能です。入力時にはできるだけスタッフや患者さんの顔写真を入れてもらうことでどの患者さんかわかるし、顔の見える関係作りにも役立っていると思います。

例えば、「インスリンを何回に増やして」など医療的な指示についてはI C T連携ツールで伝えた後に、二重にはなりますが正式な指示書を書いていますので、迅速な処置ができます。

Q5 I C T連携ツールを利用して良かったと思えることは？

迅速で確実な情報共有を行うといった目標は達成できたと思います。患者さんの家族、特に小児の移行期の親御さんが利用していて、お互いに患者さんの状態がわかるし確認もしやすい。また、看護師やデイケアから送られてきた褥瘡などの写真で状態を確認して指示を出せることは有用性が高いと思います。1週間分のバイタル等の管理も口頭だと分らなくなりがちですが、表に入力してくれると記録に残るので確認しやすいですね。

一番良いのは、自分が指示した内容が1回で多職種と情報共有できることです。訪問診療後に必要な情報をI C T連携ツールに入力すれば、夕方には訪問診療に関わる全員に情報共有できます。

Q6 利用環境（使用端末、使用ルール等）について教えてください

端末は事業所のものを使い、スマホなど個人のは絶対に使用しないことにしています。当院では必要な部署に必要な台数の利用端末を用意しています。他の事業所にも同様のことをお願いしており、担当者が異動や退職した場合は連絡をもらうようにしています。個人情報の取り扱いに関しては、事業所や患者家族とも書面でのやり取りを行うようにしています。

Q7 I C T連携ツールを利用する時の課題（困っている事）があれば教えてください

I C T連携ツールを利用する際に患者ページの作成や、新規の事業所に対する説明などがスタッフの大きな負担となっています。対象の患者さんが10人か20人ぐらいであれば1人で担当した方がスムーズにいくと思いますが、当院は在宅患者さんが200人近くいるので、4、5人で対応しています。

また、他の事業所では、当院が使用するものとは別の情報共有ツールを使用していたり、業務用の端末が無いという理由で、I C T連携ツールによる情報共有を断られる事があります。また、救急に関わる医療機関にもお願いしましたが、使用は断られました。

Q8 I C Tツールを活用することについてどのように思われますか？

今の時代、必要でしょう。有用性が高い。長年使って、今では無くてはならないものになっています。ただ、全く使っていない人がスタートする場合は、システムを運用するための人手、労力、ソフトの使用料や端末等機器の費用負担（5千円）などいくつかハードルがあると思いますが、費用に見合った効果があると感じています。

ただ、見るだけでも毎日30分はかかる。返信したりコメントをしたりすると1時間はかかるため大変ですが、医師からしても有用性があると感じています。専用端末があれば、出張先などどこでも患者さんの情報を見られるというメリットもあります。

Q9 在宅医療について、現在の課題、今後の目標は？

国が病床削減の方針を打ち出す中で、その受け皿としての在宅医療は今後ますます必要になってきます。

大事なことは、在宅医療は家や施設で最期を迎えることではなくて、自分らしく生きることを支えるものだという事。そういった観点を在宅医療に関わる人には持って欲しいと思っています。また、「在宅医療を受けている人は皆同じ考え方だ」と思うのは間違いで、高度医療を望む人もそうでない人もいます。色んな考え方があるので、患者や患者家族の思いに沿っていく必要があります。その上で、医者だけでなく多職種が連携して患者さんをサポートしていく姿勢が在宅医療では必ず必要です。

そのためには、例えば大分市在宅医療・介護連携支援センターなどが開催している連携検討会や研修会などを通じてお互いのことを知り、顔の見える関係性を作ることが大事だと思います。ただ、どの地域もそうだと思いますが、多くの職種が関係作りをしたいと思っても、医師の参加が少ないことがネックになっているので、何とかそこを広げていきたいと思っています。

それと自宅であれば家族のケア、施設であればスタッフさんのケアも大事だと思いますね。

Q10 最後に先生のモットーを教えてください

一言で言うのは難しいですが、「ハートクリニック」という名前をつけたのもそこで、医療も人対人なので、ITなどではできない心と心のつながり、人と人の信頼関係といったものを絶対忘れてはいけないということですね。

それは患者さんだけではなく、専門職や家族も同様です。



*** 情報共有ツールについて、関係者の皆さんにもお話しをうかがいました。***

専門職インタビュー

【訪問診療の同行看護師】

「日頃は訪問予定や診察の結果などをICT連携ツールに入力しています。簡単に入力でき、1回で必要な人と情報共有できるので、手間もかからず労力も抑えられています。ただ、患者さんに関わる多職種の方をICT連携ツールで情報共有できるようにするために事業所への説明や登録が必要となり、事業所ごとに環境が違うため、大きな負担となっています。一番いいと思うのは、大分市内の事業所が使う連携ツールが統一されることだと思います。

【 クリニック事務長 】

ハートクリニックは200人を超す在宅患者を抱えており、月5千円でこれだけの機能を利用することができるICT連携ツールの有用性は大変高いと感じています。

【連携する訪問看護師】

ICT連携ツールは主に医療機関との連絡手段として活用しています。相手の都合に関わらず入力でき、全員が見るので伝わってる感じがするし、取りこぼしが無いところが良いと思います。ICT連携ツールには訪問した時の患者さんの状態や薬の状況などを入力していますが、特に決まっていることが無いので入力の負担はありません。他にも、違うメーカーのICT連携ツールを使っていますが、どちらも操作性に違いはありません。

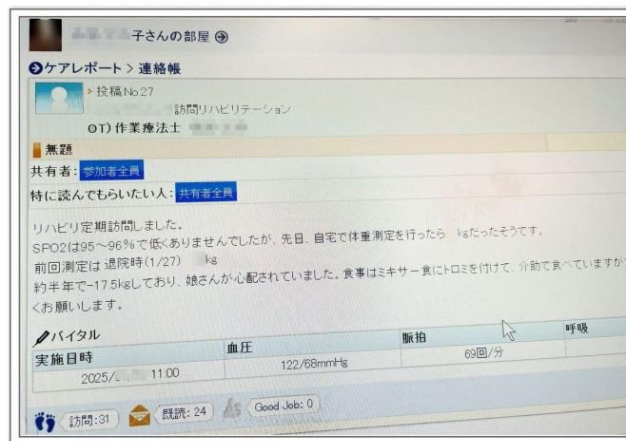
患者ご家族インタビュー

【 Nさん 】

母が県病での入退院を繰り返し、家族も負担を感じていました。転院先のハートクリニックを退院する際にICT連携ツールと心不全手帳を使った在宅医療を提案され、初めての在宅医療を開始しました。

現在は訪問看護師やヘルパーなど訪問してくれる専門職の方が心不全手帳を記入し、基準を超えた場合はICT連携ツールに入力して、先生から指示をいただいています。また、基準を超えなくても毎週日曜日に1週間分の手帳の画像をICT連携ツールに掲載しています。今ではクリニックとのやり取りはほとんどがICT連携ツールを使っていて、夜なども電話だと気を遣いますが、ICT連携ツールだと連絡しやすいです。ICT連携ツールで情報を共有しているので、先生やスタッフが常に把握してくれているという安心感があります。また、受診のタイミングが分かるので、家族の負担も軽くなりました。

【 情報共有の一場面 】



————— 以上 インタビューにご協力いただいた皆様、ありがとうございました。 —————

※ 今回ご紹介した、ハートクリニックで利用しているICT連携ツール・・・「 **カナミック** 」

【編集後記】

今回のハートクリニックの取材を通して感じたことは、「ICT連携ツール」を活用することは、利用する全ての関係者にとってメリットがあり、関係する専門職間の連携を推進するとともに患者さんや家族の安心感の醸成につながっているということである。特に患者さんのご家族が安心して在宅医療を利用できていることが印象に残った。

一方で利用している「ツール」については、経済面を含め機能的な問題は特に感じられなかったものの、地域での普及が進んでいないことなどから運用上の問題があり、今後の課題といえる。